

二老人

国木田独步

青空文庫

上

秋は小春のころ、石井という老人が日比谷公園ひびやこうえんのベンチに腰をおろして休んでいる。老人とは言うものの、やっと六十歳で足腰も達者、至つて壮健のほうである。

日はやや西に傾いて赤とんぼの羽がきらきらと光り、風なきに風あるがごとくふわふわと飛んでいる、老人は目をしばたいたいてそれをながめている、見るともなしに見ている。空々くうくう寂じやく々じやく 心中しやくなんらの思うこともない体てい。

老人の前を幾組かの人を通つた。老えるも若きも、病めるも健

やかなるも。されどたれあつてこの老人を気に留める者もなく、老人もまた人が通ろうと犬が過ぎ行こうと一切いっせつおかまいなし、悠々ゆうゆう行路の人、縁なくんば眼前千里、ただ静かな穏やかな青空がいつもいつも平等におおうているばかりである。

右の手を左の袂たもとに入れてゴソゴソやっていたが、やがて「朝日」を一本取り出して口にくわえた。今度はマツチを出したが箱が半ばなかこわれて中身はわずかに五六本しかない。あいにくに二本すりそこなつて三本目でやつと火がついた。

スパリスパリといかにもうまそうである。青い煙、白い煙、目の先に透明に光つて、渦うずを巻いて消えゆく。

「オヤ、あれは徳とくじゃないか。」

と石井翁は消えゆく煙の末に浮かび出た洋服姿の年若い紳士を見て思った。芝生しばふを隔へてて二十間けんばかり先だから判然しない。判然しないが似ている。背格かっこう好よから歩きつきまで確かに武たけしだと思つたが、彼は足早に過ぎ去つて木陰こかげに隠れてしまった。

この姿のおかげで老人は空々寂々さかの境さかいにいつまでもいるわけにゆかなくなつた。

甥おいの山やま上かみ武にさんちは二三日にさんち前、石井翁を訪とうて、口をきわめてその無為主義を攻撃したのである。武を石井老人はいつも徳と呼ぶ。それは武の幼名を徳助と言つてから、十二三のころ、徳の父が当世流に武と改名にさんちしたのだ。

徳の姿を見ると二三日にさんち前の徳の言葉を老人は思い出した。

徳の説く所もまんざら無理ではない。道理はあるが、あの徳の言い草が本気でない。眞実彼奴きやつはそう信じて言うわけじゃない。あれは当世流の理屈で、だれも言うたと、言わば口前くちまえだ。徳の本心はやっぱりわしを引っぱり出して五円でも十円でもかせがそうとするのだ、その証拠には、せんだってごろまでは遊んで暮らすのはむだだ、足腰の達人なうちは取れる金なら取るようにするが得だ、とく叔父おじさんが出る気さえあればきつと周旋する、どうせ隠居仕事のもりだから十円だって決して恥ずるに足らんと云ったくせに、今度はどうだ。人間一生、いやしくも命のある間は遊んで暮らす法はない、病気でない限り死ぬるまで仕事をするのが人間の義務だと言う。まるで理屈の根本が違って来たじゃないか、

——やっぱりわしをかせがすつもりサ……とまで考えて来た時、老人はちようど一本の煙草たばこをすい切った。

石井翁は一年前に、ある官職をやめて恩給三百円をもらう身分になった。月に割つて二十五円、一家は妻にはたち二十になるお菊と十八になるお新の二人娘で都合四人ぐらし、銀行に預けた貯金とても高が知れてるから、まず食つて行けないというのが世間並みである。けれども石井翁は少しも苦しめない。

例を車夫や職工にとつて、食つて行けないはずはないと主張するのである。むろん食うに食われない理屈はない、家賃、米代以下お新の学校費まで計算して、なるほど二十五円で間に合わそうと思えば間に合うのである。

それで石井翁の主張は、間に合いさえすれば、それでやってゆく。いまさらわしが隠居仕事で候そうろうのと言つて、腰弁当で会社にせよ役所にせよ病院の会計にせよ、五円十円とかせいでみてどうする、わしは長年のお務めを終えて、やれやれ御苦勞であつたと思給をいただく身分になつたのだ。治まる聖代みよのありがたさに、これぞというしくじりもせず、長わずらいにもかからず、長官にも下僚にも憎まれもいやがられもせず勤め上げて来たのだ。もはやこうなれば、わしなどはいわゆる聖代の逸民だ。恩給だけでともかくも暮らせるなら、それをありがたく頂ちようだい戴して、すっかり欲から離れて、その日その日を一家むつまじく楽しく暮らすのがあたりまえだ。よしんば二十五円に十円ふえたらどれだけの贅ぜいた

沢ができる。——みんな欲で欲には限りがない——役目となれば五円が十円でも、雨の日雪の日にも休むわけにはいかない、やつぱり腰弁当で鼻水をたらして、若い者の中にまじつてよぼよぼと通わなければならぬ。オ、いやな事だ！

というのである。だから役をひいた時、知人やら親族の者が、隠居仕事を勧め、中には先方にほぼ交渉わたりをつけて物にして来てまで勧めたが、ことごとく以上の理由で拒絶してしまつたのである。細君は気軽な人物で何事もあきらめのよいたちだから文句はない。愚痴一つ言わない。お菊お新の二人も、母を助けて飯もたけば八や百屋おやへ使いにも行く。かくてこそ石井翁の無為主義も実行されているのである。

ところが武の母は石井翁の細君の妹だけに、この無為主義をやぶみ、姉は盲従してこそおれ、女はやつぱり女、石井さんの隠居仕事で二十五円の上に十円ふえるならどのくらい楽と思うか知れないと、武をして石井翁を説き落とさすつもりでいるのである。

彼は変物だと最初世話をしかけた者が手をひいた時分。ある日

曜日あかさかくみなみちようの午後二時ごろ、武は様子を見るべく赤坂区南町はしの石

井をたずねた。くるま俵のはいらぬ路地の中で、三軒長屋の最端はしがそれ

である。ちゆうぶる中古の建物だから、それほど見苦しくはない。上が

り口の四畳半が玄関なり茶の間なり長火鉢ながひばちこれに伴なう一式が

並べてある。隣が八畳、これが座敷、このほかには台所のそばに薄暗い三畳があるばかり。南向きの縁先一間半ばかりの細長い庭

には柵たなを造り、翁の楽しみの鉢はちもの物が並べてある。手狭であるが全体がよく整理されて乱雑なさまは毛ほどもなく、敷居も柱も縁もよくふきこまれて、光っている。

「御免なさい。」と武は上がり口の障子をあげたが、茶の間にだれもいない。

「武です。」とつけ加えた。すると座敷で、

「徳さんかえ、サアお上がり。」と言ったのが叔母おばである。

武は上がってふすまをあげると、座敷のまん中で叔父おじ叔母おばさし

向かいの囲碁最中！ 叔父はちよつと武を見て、微笑わらつて目で挨拶あいさつ

拶いさつしたばかり。叔母は、

「徳さん少し待っておくれ。じき勝負がつくから」と一心不乱の

体^{てい}である。

「どうかごゆつくり。」と徳さんの武もこのほかに挨拶のしようがない。ただあきれ返つて、しようことなしに盤面を見ていた。

「徳さんは碁が打てたかね。」と叔父は打ちながら問うた。

「まるでだめです。」

「でも四つ目殺しぐらいはできるだろう。」

「五目並べならできます。」

「ハハハハハハ、五目並べじゃしかたがない。」

「叔母さんが碁をお打ちになることは、僕ちつとも知りませんでした。」

「わたしですか、わたしはこれです。いぶん古いのですよ。」と叔

母は言ったが振り向きもしない。

「しよつちゆう打つていらつしやつたのですか。」

「いいえ、やたらに打ちだしたのは此家ここへ引つこんでからですよ。

——ちよつとこれを待つてちようだい。」

「なりません。」と石井翁、一ぷくつけてスパリスパリと悠然ゆうぜんたるものである。

「だつてこの切断きりは全くわたしの見落としですもの。」

「だからさつきから、わしは「待ちませんよ、」「待ちませんよ」と二三度も警告を発しておいたじゃないか。」

「待ちませんはあなたの口癖ですよ。」

「だれがそんな癖をつけました、わたしに。」

武は思わずクスリと笑った。

「それじゃどうあつても待つてくださらんの。」

「マア待ちますまい、癖になるから。」

と言われて、叔母は盤面を見渡してしばらく考えていたが、

「それじゃ投げましょう。そこが切れては碁にはなりませんもの。」

「まずそう言ったような形だね。」

そこで叔母は投げ出した。これから改まって挨拶あいさつが済むと、

雑談に移り、武は叔父おじ叔母おばさし向かいで、たいがい毎日碁を打つ

事、娘ふたりはきょう上野公園に散歩に出かけた事など聞かされた。

右の次第で徳さんの武もついに手をひいて半年余りもたつと、母はやつぱり気になると見えて、どうにかして石井さんを説き落としてくれると頼む。そこで武も隠居仕事の五円十円説では到底夫婦さし向かいの碁打ちを説き落とすことはできないと考え、今度は遊食罪惡説を持ち出して滔々とうとうとまくし立ててみた。

石井翁はさんざん徳さんの武に言わしておいたあげく、

「それじゃ、山に隠れて木の実を食い露を飲んでおる人はどうする。」

「あれは仙人せんじんです。」

「仙人だつて人だ。」

「それじゃ叔父おじさんは仙人ですか。」

「市に隠れた仙人のつもりでおるのだ。」

これで武はまたも撃退されてしまったのである。

下

さて石井翁は煙草たばこ一本すいおわったところでベンチを立とうとしたが徳の遊食罪惡説がちよつと気にかかりだしたので、また一本取り出してすい初めた。徳の本心を見ぬいている。そして仙人説で撃退はしたものの、なるほど、まだびんしゃんしているのにとだ遊んで食うているというのはほめたことではないように思われる。それなら何をす。腰弁はまっぴらだ。いなかに行つて百

姓でもするか。こいつはいいかも知れんがさし当たって田地がない。翁は行きづまってしまったので、仙人主義を弁護する理屈に立ち返ってしきりと考えこんでいると、どしりとばかり同じベンチに身を投げるように腰をおろした者がある。振り向いて見るや、

「オヤ河田さんかわだじゃないか。」

先方は全く石井翁に気がつかなかつたものと見えて、翁に声をかけらるるといきなり飛びたつて帽をとり、

「コレはコレは石井さんですか、あなたとはまるきり気がつかんで失礼しました。」とぺこぺこお辞儀をする。そして顔を少しあからめた様子はよほど狼狽ろうばいしたらしい、やっぱり六十余りの老人である。

「まあお掛けなさい。そしてその後はどうしました。」

「イヤもうお話にも何にもなりません。」と、腰をおろしながら、
「相変わらずで面目次第もないわけです。」とごま白の乱髪らんぱつに

骨太の指を熊手形くまでがたにさしこんで手荒くかいた。

石井翁は綿服ながら小ザツパリした衣装なりに引きかえて、この老

人河田翁は柳原仕込みやなぎわらしこの荒いスコツチの古洋服を着て、パクパ
ク靴ぐつをはいている。

「でも何かしておられるだろう。」と石井翁はじろじろ河田翁の
様子を見ながら聞いた。そして腹の中で、「なるほど相変わらず
だな」と思った。

「イヤとてもお話にもなんにも……」とやっぱり頭をかいていた

がポケットから鹿皮しかがわのまつ黒になった煙草入れたばこいとひしやげた鉈な豆煙管たまめぎせるとを取り出した。ところがあいにくと煙草はごみまじりの粉ばかり、そのまままたポケットにしまいこんだのを見て、石井翁は「朝日」を袋とも出して、

「サアおすいなさい。」

「イヤこれはどうも」と河田翁は遠慮なく一本ぬき取つて、石井翁から火を借りた。

この二老人は三十歳前後のころ、ある役所で一年余り同僚であったばかりでなく、石井の親類が河田の親類の親類とかで、石井一家けでは河田翁のうわさは時おり出て、『今何をしているだろう』『ほんとにあんな気の毒な人はない』など言われていたのである。

「しかし遊んでもいなさらんだろうが。」と石井翁はどこまでも心配そうに聞く。

「イヤとてもお話にもなんにも……」

これが河田翁持ち前の一つで、人に対すると言いたいことも言えなくなり、つまらんとところに自分を卑下してしまうのである。

「あなたがわたしの家へ来てからもう五年になるなア」と石井翁は以前の事を思い出した。

「そうなりますかね、早いものだ……。」

「あの時、あなたが、一杯きげんで『雨の夜よに日本にっぽん近くぢかねぼけて流れこむ』をうたって踊った時はおもしろかったがね、ハ、ハ

ハ、ハ、ハ」

「ハ、ハ」といつしよに笑ったぎり、河田翁は何も言わない。そしてなんとなくそわそわしている。

三十の年に恩人の無理じいに屈して、養子に行き、養子先の娘の半気違いに辛抱しきれず、ついに敬太郎という男の子を連れて飛びだしてしまい、その子は姉に預けて育ててもらおう、それ以後は決して妻帯せず、純然たるひとり者で、とうとう六十余歳まで通して来たのが河田翁の一生である。

このひとり者が翁の不遇の原因をなしたのか、不遇がひとり者の原因であったのか、これをわかつことはできない。

善人で、酒もしいては飲まず、これという道楽もなく、出入交際の人々には義理を堅くしていて、そしてついに不遇で、いつも

まごまごして安定の所を得ず今日きょうが日ひに及んだ翁の運命は、不思議な事としか思えない。

そこで石井の人々初め翁を知っている者はみな『気の毒な人だ』
と言ひ、また不思議なことだと評している。しかし皆々言い合
わしたように一致している『理由』がないのでもない。第一、河田
さんはいくじがない。その証拠には、養子に行く前に深く言いか
わした女があつた、いよいよ養子に行くときまるや五円で帯の片
側を買つて、それを手切れ同様に泣く泣く別れた。第二に、案外
片意地で高慢なところがあつて、些ささい細な事に腹を立てすぐ衝突し
て職業から離れてしまう。第三に、妙に遠慮深いところがあるこ
と。

なるほどそう聞かされると翁の知人どものいわゆる『理由』は多少の『理由』を成している。

けれど大なる理由がまだなければならぬ。人がもし壮年の時から老人の時まで、純然たる独身生活すなわち親子兄弟の関係からも離れてただ一人、今の社会に住むなら並み大抵の人は河田翁と同様の運命に陥りはせまいか、老いてますます富みかつ栄えるものだろうか。

翁の子敬太郎は翁とまるきり無関係で育ちかつ世に立った。そして二十五六のころ、八百屋やおやを始めたが、まもなくよして、売うらなト者いしやになった。かつ今は行き方ゆがたも知れない。そして見ると河田翁その人の脈みやくらくには、『放浪』の血が流れているのではない

か。それが敬太郎へも流れこんだのではないか。

石井翁はむろんこういうことを考えて研究もせず、ただ気の毒がる仲間の一人ゆえ、どうにかして今の境遇も聞いてみたいと思ひ、古い事まで話題にしてみたが、河田翁は少しも引き立たない。ただそわそわしている。

「何時でしようか」と河田翁は卒然聞いた。石井翁は帯の間から銀時計の大きいのを出して見て、

「三時半です」

「イヤそれじゃもう行かなきゃならん。」と河田翁は口早に言つて、急に声を潜め、あたりをきよろきよろ見回しながら、

「実はわたし、このごろある婦人会の集金係をしているのですか

ら、毎日毎日東京じゆうをへめぐらされるので、この年ではとてもやり切れなくなりました、そこでも少し楽な仕事をと頼んで歩きましたら、やつとうまい口が^{めっか}発見つたんです。それは食^{くい}扶^い持^ぢいっさいむこう持ちで月給が七円だというのです、それでからだを動かすことはあまりないというんですから、さっそくそれに決めたのです。ところが、「とあたりを見回した上にさらに延び上がって近所を見回したが、一段声を潜めて「わたしは大変なことをしているんだ、とかく足らん足らんで一円二円とつかい込み、とうとう十五円ほど会の集金をつかい込んでしまったのです。サアそれもチャンと返して帳簿を整理しておかんと今のうまい口に行く事ができない。そこでこの四五日その十五円の調達にずいぶん

駆け回りしましたよ。やっと三十間堀さんじゅうけんぼりの野口という旧友の倅せがれが、返済の道さえ立てば貸してやろうという事になり、きよう四時から五時までの間に先方で会うことになっています。まあザツとこんな苦しいわけで……けれどつかい込みの一件は、ごく内密にお願いします」と言つて立ち上がり、石井翁が何も言い得ぬうちに、河田翁は辞儀をペコペコして去つてしまつた。

石井翁は取り残されて茫然ぼうぜんと河田翁の後ろ姿を見送つていた。河田翁が延び上がつて遠くまで見回したのは巡査がこわかつたのだ。そこで翁と巡査とすれ違つた時に、河田翁は急に帽子に手をかけて礼をした。石井翁は見ていてその意味がわからなかつた。

(完)

青空文庫情報

底本：「号外・少年の悲哀 他六篇」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年4月17日 第1刷発行

1960（昭和35）年1月25日 第14刷改版発行

1981（昭和56）年4月10日 第34刷発行

入力：紅 邪鬼

校正：鈴木厚司

2000年7月12日公開

2004年6月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二老人

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>